



先祖伝来の田再生

岩尾さん(大分市) 中学時代に聞いた祖母の思い胸に

【大分】大分市岡川の会社員岩尾健吾さん(24)は中学生の頃から荒地を耕して米作りを始めた。昔の田園風景を懐かしむ祖母を喜ばせようと一念発起。約5年の月日を費やして先祖伝来の田んぼを再生した。「新型コロナウイルスが収束したら子どもたちが農業に触れる機会をつくりたい」と仕事の合間に汗を流している。

会社の仕事後や休日、作業に汗約5年を費やす



機械を使った田植えの後、抜けた所に苗を植える。挿植をする岩尾さん(大分市岡川)

自宅近くにある荒地は以前、田んぼだった場所。10年ほど前、散歩の途中、祖母の安東幸子さん(81)が「昔は夫婦で牛を使ってすきを引いていたのに」ともらした。肩を落とす姿を見て、田んぼを復活させようと決心した。

鎌やのこを使って手作業で草刈りを始めた。長年放置された地面には、くわが刺さらないほど竹の根が張り巡らされていた。荒地地の整備が終わり、高校3年の時、初めて米を育てた。肥料の配分ミスやイノシシによる獣害で収穫はほぼなかった。

社会人1年目の二十歳の時、家族や近所の人の助言を参考に作業を進めた。就職の準備などで、2年間農作業ができなかった思いを田んぼにぶつけた。秋には約200平方メートルの田んぼか

ら約30キロの米が取れた。初めて収穫した米を食べた時の感動は忘れられない。「今まで食べた米の中で一番おいしくて涙が出そうになった。農業が好きで、亡くなった祖父にもお供えしました」

種まきから精米まで全て1人でこなす。仕事の後や休日自分で調達した農機具を使って作業に励む。できた米はインターネットで販売する。現在は近隣住民や別府市の内成棚田でも開墾を進める。耕作者の高齢化に伴って田を譲り受けることも、使用する土地は計約1畝になった。「自分でまいた種が育って穂が垂れると、やりがいを感じる」と農業の魅力にどっぷりはまっている。

大分市の会社員岩尾健吾さん(24)は荒地地を耕して米作りを始めました。中学生の頃から約5年の月日を費やし、先祖伝来の土地を田に再生しました。

2021年6月9日付 大分合同新聞 13面

- ①岩尾さんが中学時代に荒地地を耕して米作りを始めようと一念発起した理由は？記事の中かから探してください。

昔の田園風景を懐かしむ()を()と()と思ったから。

- ②高校3年の時に初めて米を育てましたが、収穫はほぼありませんでした。原因は何ですか。

- ③社会人1年目の二十歳の時に農作業を再開し、秋には初めての収穫を喜びました。その後は、近隣や別府市の田で開墾を進めるなど農業の魅力にどっぷりはまったということです。岩尾さんが現在、米作りに使用している土地の面積は、当初の何倍の広さになりましたか。

- ④岩尾さんの夢は何ですか。記事の中から()に入る言葉を探してください。

「子どもたちが()」